

トルコ・ボドルムで開催された2022年OP世界選手権にコーチとして参加した。当地ではコロナ禍もほぼ治まり、61ヶ国、276名という史上最大規模のOPワールドとなった。2009年以来、実に13年ぶりにコーチとして復帰したのだが、まさに隔世の感である。しばらく見ない間に、世界は大きく進化していた。



ボドルムは評判通り連日良い風が吹いた

日本から参戦した5名は近年稀に観る精鋭であり、我が国の実力を結集したセーラーたちと呼んで異論はないだろう。チーム結成当初から、5名全員で2桁以内の成績獲得を目標とし、複数回の合宿や、毎週のオンラインミーティングを重ねてきた。6月25日に現地入りしてからも体調管理やチャーター艇のセッティング等、まさに万全の状態で開幕を迎えた。

予選第1レースで、いきなりの藤田・堤ワンツーフィニッシュなど、序盤戦は手応えを感じた部分もあった。だがレガッタが進むにつれ次第に実力差が明らかになり、最終的には本多剛67位（ゴールド）、堤悠人76位（シルバー）、藤田蒼士95位（シルバー）、堀野瑠夏144位（ブロンズ）、池田港介146位（ブロンズ）と、チームの目標を達成することは叶わなかった。事前の感触としてゴールド3名、シルバー2名は十分に達成可能であり、選手たちのメンタル面へのサポートが足りなかったとしたら、コーチの責任は免れない。



見事に逆転優勝のウェカ選手と

激戦を制して栄冠を勝ち取ったのは、2019年の鹿児島全日本にも参加した、タイのウェカ・バーヌバン選手だ。トップ20の顔ぶれを見ると北米や南米の選手もチラホラいるが、やはり中心はヨーロッパ勢で、とりわけイタリアが圧倒的に強い。女子の優勝は総合24位であり、男女の実力差は大きく開いた感がある。

また特筆すべきは、ウェカ選手の優勝スコアだ。トップは僅かに予選の1回のみで、全12レースの平均は8.7点と、決して派手ではない堅実な成績である。数年前までは、イタリア

のマルコ・グラドーニ選手に代表されるように、成績表に1と2しかないような優勝スコアだった。その頃いかにトップ選手たちのスピードが他を圧倒していたかを示している。いまやそのスピードは各国に伝わり、群雄割拠に戻ったフェーズなのではないだろうか。

残念ながら日本の選手は、まだ誰もその一段上の走りを身につけていない。15ノット以上の風域に関しては、世界と伍して戦えるスピードがあったが、8-12ノットの中風域については明らかにトップ集団に劣っていた。スピードの苦しさが必要以上のリスクを取る原因となり、普段通りの走りを見失ってしまうメンタル要素にもなってしまったと推測できる。

余談になるが大会終了後もヨーロッパに残った筆者は、この最新の走りの秘密を探るべく、イタリアでのクリニックに参加した。ウクライナ、スロベニア、イタリアのトップコーチたちは、特に下半身の使い方に重点を置いて指導しており、とても斬新な内容であった。全国のセーラー・コーチに還元したいと考えている。

目標に届かなかったとはいえ、各選手は最後まで諦めずにベストを尽くしてくれた。その結果が国別20位、チームレースベスト16という好成績につながった。池田監督を中心にまとまりが良く、選手同士の仲も大変良かった。またお母さんたちの献身的なサポートも大変ありがたかった。海外選手たちとのたくさんの交流もあり、一生忘れられない経験になったのではないだろうか。

最後に僭越ながら提言がある。トルコ滞在中を通して感じたのだが、IODAやアジアの連盟の中で、JODAの存在感は殆どないに等しい。もっと日本からの情報発信や、海外レース・クリニックへの参加、大会誘致などを積極的に行うべきである。複数のIODA幹部や海外コーチたちからも、日本はおとなしい、もっと日本のカラーを出してアジアを牽引して欲しいと言われた。総会での投票権放棄などもってのほかだ。長く会員数の減少が続き、財政難に陥っている事情も承知しているが、ならば尚のこと、IODAの中でのプレゼンスを高め、世界との交流を深めるべきである。その中に、日本オプティミスト復興の鍵が隠れているのではないだろうか。



来年の世界選手権は6月にスペイン・コスタブラーバで開催される予定だ。日本チームは大量の中三世代が抜けて一気に若返りが予想される。そんないまこそ、地に足をつけた強化と普及に勤むべきだ。筆者も貴重な機会をいただいたお返しに、できる限り多くのセーラー・コーチ・保護者の方々へ学んだことを伝えていきたい。